

令和7年度第1回北海道立旭川美術館協議会議事録

- 1 日 時 令和7年（2025年）7月11日（金） 13時30分～15時30分
- 2 場 所 北海道立旭川美術館講堂
- 3 出席委員 石前聖香（会長）、大石朋生（副会長）、浅野智子、阿部ひとみ、奥野由貴代、岸本恵理加、中村欣也、宮田琴羽、両瀬渉（12名中9名）
＜敬称略 50音順＞
- 4 傍 聴 者 なし
- 5 出席職員 館長 中村聖司、副館長兼総務課長 中山雅博、主査 山岸由記、主事 岩田将平、学芸員 津田しおり、学芸員 浦島七那
- 6 議 事
館長挨拶、展覧会鑑賞、会長の選任の後、会長の議事進行により、次の議事について、各委員に諮った。
（1）令和6年度（2024年度）事業実施状況について
（2）令和7年度（2025年度）事業運営計画について
（3）これからの旭川美術館について

	～議事(1)について、配付資料に基づき、事務局から説明～ 〈 意見、質問等なし 〉 ～議事(2)について、配付資料に基づき、事務局から説明～ 〈 意見、質問等なし 〉 ～議事(3)について、配付資料に基づき、事務局から説明～
会長	学芸員や美術館職員に望むことや道北地域の課題とその解決に向けて、それぞれ活動されている立場から旭川美術館に取り組んで欲しいこと、旭川美術館で継続すべきこと、伸ばすべきところ加えるべきところなど10年、20年後に旭川美術館がどうなっていってほしいのか、率直なご意見を願います。
事務局	当館が開館43年目となり老朽化や収蔵庫が一杯であるなどの施設面の課題を抱えている。長寿命化工事を実施する場合、今後20年使用するため施設の見直しをするとともに、これを機会に美術館を良くしていくような、期待に応えられるような事ができないかを考えている。地域の方が何を求め、それに応えるには何をすべきか考えていきたいと思っている。もっとできること、10年、20年先を見据えて旭川美術館がどうなっていけば良いか、感じていることを気軽に話してほしい。
委員	親子向け、学校、教員向けの教育普及活動が掲げられているが、美

委員	美術館は社会教育施設としての役割を担っているの、ここに高齢者向けの事業も入れていただきたい。高齢者学級などに美術鑑賞の案内をいただければ、時間にゆとりのある高齢者の来館に繋がるので、取り組んでいただきたい。 また、海外の方が沢山いらしているので、インバウンドに対する試みが必要。例えば旭川空港、旭川駅、市内のホテルなどにパンフレット、できれば英語版や中国語版など外国語版を置き、ポスターの展示を行う。旭川には動物園もあるけど美術館もあると PR するべきだと思う。 旭川美術館には車椅子用トイレが1つあるが、高齢者にとって一般のトイレの中に手すりをつけるだけでも違ってくる。 介護施設はコロナが開けて、レクリエーションで外に出る機会があるので、気軽に見ていただけるようなアピールが必要。 SNS のフォロワーが増えているが、フォロー返しが少ないのではないかと感じる。フォローを返し、拡散してもらえらる要素になるようにしていくことが必要。
委員	美術の見方が変わってきたと受け止めている。公立である大阪中之島美術館でもゲームキャラクターの原画の展示を行っている。これからはサブカルチャーを取り入れていただきたい。 「新・山本二三展」を4/12～6/15に開催されているが、小中学生や高校生にとっては夏休み期間に開催すると来やすくなるので期間にも注目していただきたい。
事務局	期間については、来館者アンケートでも意見をいただいている。私たちがそう思っている。巡回展は、いつ旭川で開催できるか全国とのスケジュールの関係や、夏休み期間は費用が高く、春休み期間は他はやらないので安いと言う事情もあったのかもしれない。喜んでくれる人が来やすい時期に開催できるように検討したい。
委員	「新・山本二三展」を観覧した際に、アニメを見ている方が細かい部分まで見て話をしていた。美術としての見方が多様化してきていると感じている。 オンラインアート教室は、旭川市内でも美術館に連れてこられない学校もあるのでありがたく思っている。準備もあり、参加できる学校数は限られている。通信環境も必要で、複数校と同時配信できるよう、整備に取り込んでもらえたらと思う。堅苦しくなく興味を持ってもらい、もっと詳しく知りたくなったら美術館に来てもらう、広い入口とすることが、教育にとって非常に大切な役割となるので、子ども達が大人になり美術館に足を運んでもらうように取り組んでもらいたい。

委員	「会いにいこう！アートになった動物たち」展は旭山動物園や旭川市中央図書館、教育大旭川校と連携するとのこと興味深い。 「かがくいひろしの世界」展では、赤ちゃんアワーは非常に素晴らしい。大きい声を出す赤ちゃんの居るお母さんは美術館を諦めている方もいらっしゃるので、色々な事を考え計画されていると思った。ぜひ皆さんに広め発信したら良いと思う。 学習指導要領に沿ったオンラインアート教室の実施は、何年生のこの単元に使えると整理して学校へ情報を発信したらニーズが増えそう。 「新・山本二三展」は楽しかったし、「かがくいひろしの世界」展は興味がある。今の美術の授業は我々が習っていたものと違って、中学の授業でアニメーションの編集を行うこともある。美術の価値観がどんどん変わってきていると考えると「新・山本二三展」のような展覧会は興味を持って足を運んでもらえると思う。
委員	サブカルチャーの展覧会など、東京方面で今人気のある展覧会は映像、音楽や光で体感できるものが多くなっている。昔ながらの美術館を続けていると遅れていく印象がある。 旭川美術館自体のファンを作る観点でいうと、SNS のコメント返しを多少行った方が良いのかなと思う。
委員	直接お客様と接しているので生の声が聞ける。売店や喫茶の接客でも今日の展示はどうだったか聞くようにしており、必要に応じて美術館へ伝えていくことをこれからも、続けたいと思う。
会長	アンケートの回答が1%～3%と聞いたが、常磐会に聞かせてもらえる声もアンケート。大きな意味を持つと思う。
委員	大学と美術館の抱える問題はとても似ている部分がある。少子高齢化が進んでいく中、リンクしていく部分と持続可能な部分を探していくことの課題は一緒だと考えている。 美術館の場合、サブカルチャーという言い方がすでに古くなっていて、サブではなくメインストリートになっている感覚。チームラボの活動が新時代になってきて、インスタレーションを含めて美術に取り込まれているのが現実。幅が長くなり美術の枠組みが広がっている。難波田先生も素晴らしいし二三先生の作品も面白い、同じく語るのは難しい。伝え方、入口、出口をどうするかが問題だと考える。 これからの旭川美術館について、持続可能な活動は何か。第2展示室で見た地域の公募展、団体展は持続している。日本全国の公募団体があるが、道展だったり全道展だったり北海道はそこが結構強い。新

	ロマン派や純生展も継続的に今まで続いている。これからは地方の団体と一緒にやっていくと持続的な活動ができるのではないかなというのが、保守的な考えでの美術館の在りよう。 インバウンド含め海外からの人口を増やしていくし、新しいプロジェクトマッピングみたいのをやって人々が此処に集う場として考えると革新的な部分でかなり変わっていかないとならない部分もあると思う。改築やバリアフリーも含めて、一定程度のお金がかかってくるので難しいとは思いますが、そこをやっていくのかを今問われている。 まずは出来ることとして、第1展示室から第2展示室への動線を作ること。第1展示室の「砂澤ビッキの生きた時代」展と第2展示室の「砂澤ビッキと出会った芸術家たち」展の見せ方は、そのまま足を運んでいただけて一番良いと思う。それも含めて入口から出口までをつなげて動線を作っていくことで集客や周知に繋がっていくことが大事。 「かがくいひろしの世界」展も子ども達が集ってお母さん達も明るい中で遊ばせられるような環境作りが必要で、サイパル（旭川市科学館）は成功しており、連携すれば持続可能性を維持できるのでは。
会長	地域の公募展など長く続いているものを大事にして、もう一度見つめ直していく、仕舞っておくだけにしないで定期的にファンを地道に拡げていくことが必要。「集う場」と言うのもキーワードかなと思う。老若男女、子ども達、高齢者、海外の方達が気軽に足を向けられるような美術館が、みなさんから出た美術館のひとつの姿なのかと感じた。
事務局	すぐにできそうなことや中期的な視点をもってやっていくことなどご意見をいただいた。 「かがくいひろしの世界」展の他の会場の写真や図録を見ると、展示はかがくいさんの作家性をまっとうに出しているように見える。 1人の創作者をきちんと検証するという当然のことを含めて、子どもたちに喜んでもらえるような工夫もしてまいりたい。 （ 終 了 ）